

オルソン円環モデルに基づく家族機能評価尺度の作成* —FACESKGIV・実年版の開発—

横 山 登 志 子**
 橋 本 直 子***
 栗 本 か お り****
 立 木 茂 雄*****

我々はオルソン円環モデルに基づく家族機能評価尺度第4版を開発した。これは、関西学院大学・立木研究室でこれまでに開発してきた、独自の自己報告式測定尺度 FACESKG (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale at Kwansei Gakuin) シリーズの流れに沿ったものである。今回の尺度開発は FACESKG III でも課題となった、きずな次元のカーブリニア仮説の検証のために、質問項目に更に改善を加えた。なお、対象とする家族ライフサイクルを成人した子どもをもつ家族とした。その結果、今まで実証されていないきずな次元でのカーブリニア仮説が検証された点で、意義が大きい。本論文では、オルソン円環モデルの実証的研究からその問題点を明確にし、FACESKG III で課題となったきずな次元のベッタリ (enmeshment) 家族の定義を行い、その上でオルソンらの FACES シリーズと代表的な家族アセスメント尺度である FES (Family Environment Scale) と FAM (Family Assessment Measure) の項目内容を検討する。そして、FACESKG IV・実年版の開発の方法・結果・ASTWA (Addiction Screening Test for Wives of Alcoholics) を用いたカーブリニア仮説の検証・考察について順次述べる。

オルソン円環モデルの実証的研究と、その問題点

オルソン円環モデル

ミネソタ大学の Olson らは、米国において過去50年間にわたる家族システムの理論的・実証的研究を行ってきた結果、家族の機能度を知る上で、きずな (cohesion) とかじとり (adaptability) が重要な次元であると導き出し、これら2つの次元を組み合わせて結婚・家族システムの円環モデル (Circumplex Model) を発表した (Olson, Sprenkle, & Russell 1979; Tatsuki, 1985; 武田・立木, 1989)。きずなとは家族の凝集性のことを意味しており、操作的概念は情緒的結合、家族相互作用への関与の度合い、夫婦関係、親子間の連合、内的境界 (時間・空間・意思決定)、外的境界 (友人・趣味・余暇活動) である。かじとりとは内的・外的な圧力に対する家族の変化の柔軟性を意味しており、操作的概念はリーダーシップ、しつけ、問題解決の相談、役割関係、きまりである。また、円環モデルはきずなとかじとりが互いに独立した概念であると考え、横軸にきずな次元、縦軸にかじとり次元を持つ直交二次元座標によってあらわされる (図1)。横軸のきずな次元は家族の集団凝集性の程度によって、低い方からバラバラ

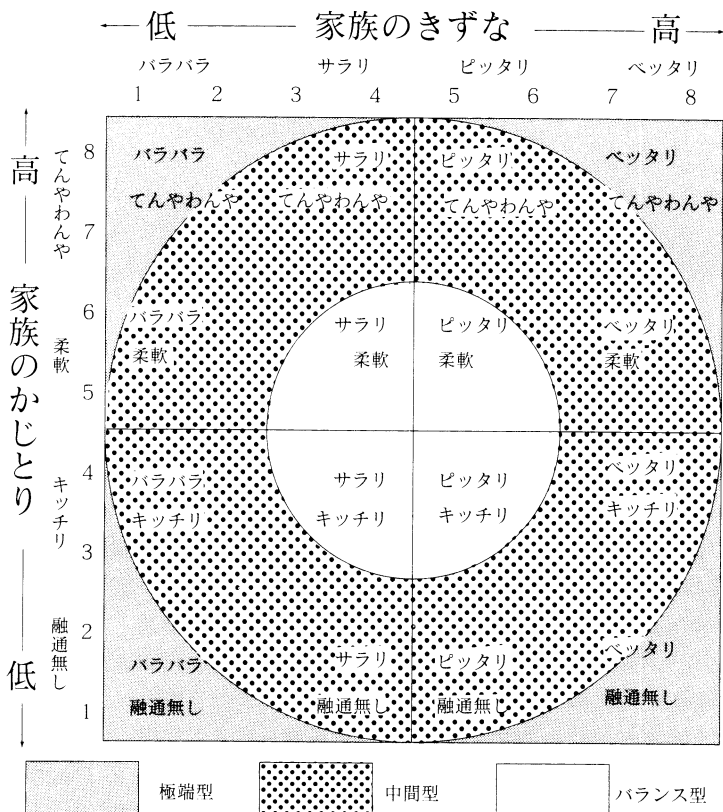
*キーワード：円環モデル、カーブリニア仮説、FACESKG

**関西学院大学大学院社会学研究科博士課程前期課程

***関西学院大学大学院社会学研究科博士課程前期課程

****関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程

*****関西学院大学社会学部教授



(disengaged)、サラリ (separated)、ピッタリ (connected)、ベッタリ (enmeshed) と分けられ、縦軸のかじとり次元は家族の変化の柔軟性の程度によって、低い方から融通なし (rigid)、キッチリ (structured)、柔軟 (flexible)、てんやわんや (chaotic) と分けられる。円環モデルでは、家族システムをきずな・かじとり両次元の4レベルの組み合わせから16タイプに分類する。両次元とも中庸レベルの4タイプを「バランス型」、一方の次元のみが極端なレベルにある8タイプを「中間型」、両次元とも極端なレベルにある4タイプを「極端型」と呼ぶ (Olson, Russel, & Sprenkle, 1983; 武田・立木, 1989; 池埜ら・立木, 1990; 大塚・立木, 1991; 武田・立木, 1991)。また、きずな・かじとりの両次元とも中庸に近づくほど家族機能の健康度が高く、極端に近づくほど病理性が高まるというカーブリーニア性が仮説として想定されている。

オルソンらは、円環モデルに基づく質問紙とし

てFACESシリーズを開発した (Olson, Bell, & Portner, 1985, 1982; Olson, Portner, & Lavee, 1985)。また、関西学院大学・立木研究室では1986年以来、日本の文化的・社会的背景に配慮してオルソン円環モデルに基づく独自の質問紙FACESKGを開発してきており、FACESKGⅢは栗本 (1995) がそれまでのライカート尺度からサーストン尺度に変えて開発したものである。

カーブリーニア仮説の実証的研究

オルソンらの開発したFACESシリーズは、ライカート尺度を採用してつくられた自己報告式の質問紙である。FACESは1978年に開発され (Olson, Bell & Portner, 1978)、その後 Beavers と Voeller (1982) の批判を受けて、理論モデルの変更が加えられたことからFACESⅡ (Olson, Portner, & Bell, 1982) が開発された。さらに信頼性、妥当性、治療上の有効性を改善するために、FACESⅢ (Olson, Portner, & Lavee, 1985) が開

発されている。一般的にこの第3版がよく用いられている。しかしこれらの質問紙を用いた実証的研究では、きずなでのカーブリニア仮説が検証されていない (Pratt, & Hanson, 1987; Kuehl, Schumn, Russell, & Jurich, 1988; Walker, McLaughlin, & Greene, 1988; Green, 1989; Doherty, & Hovader, 1988; Green, Harris, Forte, & Robinson, 1991a, 1991b; Vandvik, & Eckblad, 1993; Dundas, 1994)。たとえば、FACES IIを用いた Walker ら (1988) の調査では、機能的心身症状 (functional somatic complaints) を持つ青少年の家族と健康な青少年の家族の家族機能を測ったが、結果は心身症状を持つ青少年の家族の家族機能と心身症状の間にカーブリニア関係はみられなかった。彼らは、この結果について、臨床評価尺度で測定したものと FACES II で測定したものとは、ベッタリ概念に矛盾があるのではないかと述べている。そして、自己報告式の測定用具が家族機能を測ることの限界と、きずなが健康や幸福度とリニアな関係をもつのではないかと指摘している。また、Green ら (1991) は FACES III を用いて 2440 人の男性に調査を行っている。被験者は FACES III 以外に個人の生活や環境の満足度を測る GCS (Hudson's Generalized Contentment) 尺度と、結婚生活の満足度を測る KMSS (The Kansas Marital Satisfaction Scale) 尺度にも答えている。結果はきずなが高い傾向にあると認められた男性は、低いと認められた男性よりも結婚生活に満足しており、自分の生活や環境にも満足しているというものであった。結局、きずなのカーブリニア関係は否定された。さらに、Dundas (1994) は FACES III とあわせて、家族の健康度を測る Beavers (1985) の開発した SFI (Beavers Self-report Family Inventory) を 177 人のノルウェー人の青年男女に調査を行った。結果は、FACES III の得点と SFI の得点がリニアな関係であった。つまりここでもきずなのカーブリニア関係は否定されたのである。

先に述べたように、FACESKG シリーズは我が国の文化的コンテクストに即して開発された質問紙である。FACESKG は 1987 年に開発され (石川, 1987; 武田, 1989; 池埜ら・立木, 1990; 武

田・立木, 1991)、その後 FACESKG で欠落していたきずなの操作的概念「親子間連合」についての検討を行った上で、全体的に行動レベルの項目内容を重視し、FACESKG II (岩田ら, 1990) が開発された。そして、さらに改善を加えて FACESKG III (栗本, 1995) が開発された。しかし、これらの FACESKG シリーズでも、オリジナルの FACES シリーズと同様に、きずなのカーブリニア仮説が検証されていない (立木, 1994; 立木・栗本, 1994; 西川, 1995)。たとえば、FACESKG II を用いた中学生が知覚する家族のきずな・かじとりと、子どもの無気力との関係をみるために行った調査 (立木・栗本, 1994) では、かじとりは無気力度との関係でカーブリニア関係が実証されたが、きずなではバラバラに近づくほど無気力度が高くなり、ベッタリに近づくほど無気力度が低くなるというリニアな関係が認められた。さらに、FACESKG II を用いて高校生が知覚した家族のきずな・かじとりと、子どもの自我同一性発達との関係をみるために行った調査 (立木・栗本, 1994) でも、かじとりでカーブリニア関係が認められたが、きずなではベッタリに近づくほど自我同一性発達の度合いが高くなるというリニアな関係が認められた。加えて、FACESKG II を用いて中学生が知覚した家族のきずな・かじとりと、登校ストレスとの関係とみた調査 (平尾, 1993; 立木, 1994) でも同様にきずなと登校ストレスの間にリニアな関係があるという結果であった。

以上のような結果を踏まえて、栗本 (1995) は FACESKG III を開発する際に、それまでの FACESKG シリーズでカーブリニア仮説が検証されない理由を 2 つ挙げた。ひとつはモデル自体が家族の実態を反映していないという、円環モデルそのものの誤りとする立場である。もうひとつは円環モデルの妥当性には問題ないが構成概念の手続きに問題があるとする立場である。栗本は後者の立場をとり、きずな自体はカーブリニアな概念であるにもかかわらず質問紙に反映していないと考えた。そこで、きずなを問う質問項目を高ければ高い方がいいとされる「家族の暖かさ」ではなく、家族の集団凝集性の程度を具体的に問う行動レベルの項目内容とした。また、ライカート尺度からサーストン尺度に変えることによって両次元の各

レベルを正確に反映できるように改善した。しかし、尺度の構成概念妥当性は得られたものの、きずなのカーブリーニア仮説の検証には問題があった。たとえば、アルコール依存症者の妻たちに行った FACESKGⅢの調査(西川, 1995)では、夫の断酒状況との関係でかじとりではカーブリーニア関係が認められたが、きずなではバラバラを除外しないとカーブリーニア関係が見出せなかった。以上のように、先行研究では FACES 及び FACESKG シリーズのきずなと心理社会的変数の間には、カーブリーニア関係ではなくリーニアな関係が指摘されている。つまり、きずなの得点が高いほど(ベッタリ)家族機能度が高いという結果が見出されている。

カーブリーニア仮説が検証されない理由としての尺度上の問題

我々はこれまでの FACES シリーズあるいは FACESKG シリーズで、きずなでのカーブリーニア仮説が検証されなかった理由を、円環モデルと尺度の対応性の問題とし、特にきずな(cohesion)を家族のサポート度や親密度としてあらわしてきたのではないかと考えた。そうすると、きずなが最も高いレベルであるベッタリ(enmeshment)を最も望ましい状態ととらえるのは、自然なことである。しかし、きずなは家族のサポート度や親密度によって定義されるものではないことは、その操作的概念から明白である。従って、ベッタリ家族についてのレビューをした上であらためて明確に定義し、その上で FACES シリーズと代表的な家族アセスメント尺度である Family Environment Scale (FES, Moos, Insel, & Humphrey, 1974) と Family Assessment Measure (FAM, Skinner, Steinhauer, & Santa-Barbara, 1983) の項目内容を検討し、ベッタリが測定されているかについて述べる。

きずな次元のベッタリ(enmeshment)家族についての検討

円環モデルはその重要な特徴としてカーブリーニア仮説をとっているが、きずなにおいて未だに検証されていないのはすでに述べたとおりである。しかし SIMFAM (Simulated Family Activity

Measurement) を用いた家族の機能水準の測定では、きずな・かじとりが中程度の家族は極端な水準の家族よりもより機能的であるということをサポートする結果となっている(Russell, 1979)。加えて CRS (Clinical Rating Scale) を用いた研究でも、きずなのカーブリーニア性が認められた(大塚・立木, 1986)。また、臨床的にみても円環モデルの仮説には妥当性があると考えられる。従って、栗本(1996)の述べているように円環モデルと尺度との対応性に問題があると考えられる。以上のことから、きずなの最も高いレベルであるベッタリ(enmeshment)について検討することとした。

enmeshment とは、構造的家族療法で知られている Minuchin (1974) の述べた家族の交流の一スタイルであり、これが enmeshment 概念の基盤になっている(Sauer, 1982)。Minuchin は enmeshment とそれに相対する意味の disengagement という言葉を、家族成員間と家族のサブシステム間の境界の性質に関わる用語として用いている。そして、enmeshment は常に彼ら自身に関心を向け、過度にかかわりあうような家族成員間の境界の不明確さがその特徴だと説明している(Sauer, 1982; Barker, 1993)。また、同様に家族の構造を重視する Boszormenyi - Nagy (1965) も融合(fusion)という言葉で家族のからまりあった状態を説明している。Boszormenyi - Nagy は融合を家族成員間の個性が互いに融合しあう家族とし、家族成員の個性を嫌う傾向があると述べている(Sauer, R. J., 1982)。Kantor と Lehr (1975) は感情の融合(affect fusion)という言葉で家族の非常に強い情動的なつながりを説明した。そこでは家族成員間の境界は拡散し、家族成員が独自の個性をもって家族以外の仲間と親密である限り、家族の中に存在することはできないと述べている(Sauer, R. J., 1982)。また、Bowen (1978) は、家族の問題は家族成員が原家族から心理的に分離していないことから生じることが多いと考えて、拡大家族システムに注目し、未分化な家族の自我の塊(undifferentiated family ego mass)という言葉で、家族の情動的な一体性について説明した(Barker, 1993; 遊左, 1984)。彼によると情動的な一体性はどの家族にも見られるが、情動的な一体性が特に強い家族では

家族成員は互いの感情、考え、空想、夢を知っておくことを要求すると述べている (Sauer, 1982)。また、Searles (1965) は家族の共生的自我 (family-wide symbiotic ego) という言葉で家族全体に見られる共生的プロセスを説明した。彼によると個別化は家族の統合を脅かすものであり、家族自我に依存する家族成員を守るために情動的な力を発展させると述べている (Sauer, 1982)。

以上をふまえて、我々はベッタリ (enmeshment) 家族を次のように定義した。つまり、ベッタリ家族とは「家族成員が互いに、からみあい (intertwined)、織りまぜあい (interwoven)、過度な巻き込まれ (overinvolved)、気を取られている (preoccupied) 状態 (Sauer, 1982)」である。その特徴は、多くの研究者が指摘しているように、家族成員間の明確でない境界・家族成員それぞれの他者依存的なアイデンティティー・家族間の共生的関係・自我融合の共有にまとめることができる (Boszormenyi-nagy, 1965 ; Bowen, 1966 ; Minuchin, Montalvo, Guerney, Rosman & Schumer, 1967 ; Satir, 1967 ; Wynne, Rycoff, Day & Hirsch, 1958 ; Whitaker, 1965 cited in Barnhill, L. R., 1979)。加えて、このような構造をもった家族は Bowen の述べているように強い情

動的一体感を有しており、非常に閉じたシステムであるために病理性を内包しやすいと考えられる。

FACES シリーズのきずな・ベッタリ項目の検討.

Olson らの FACES シリーズで、きずなのベッタリ (enmeshment) 項目がどのような内容なのかを、先に述べたベッタリ家族の定義に即して検討した。FACES のきずな・ベッタリ項目 (表 1) では、中庸程度がよいとされるような、いわゆるきずな (cohesion) のベッタリを問う内容がみられる。たとえば、「家族から離れて時間を過ごすことはできない」(No. 5)、「一人でいる時間がほしいと思ったら罪悪感を感じる」(No. 9)、「家にな一人になる所がない」(No. 16)、「ある家族メンバーの代わりに他の家族が答える」(No. 22)、「興味や趣味を全部分かち合っている」(No. 28)、「家族間の巻き込まれ (involved)」(No. 76) や、「家族は互いに逃れることはできないと知っている」(No. 109)、「家族で決めたことに沿ってやらなければいけないと感じる」(No. 111) などである。しかし、ベッタリ項目でありながら、同時に社会的に望ましいとされるような項目内容もみられる。たとえば、「両親はいつも一緒にいる」(No. 13)、

表 1 FACES のきずな「ベッタリ」の項目

3. We don't have spur of the moment, guests at mealtime.
5. It's difficult for family members to take time away from family.
9. Family members feel guilty if they want to spend time alone.
11. In our family, we know where all family members are at all times.
13. The parents in our family stick together.
16. It seems like there is never any place to be alone in our house.
20. Family ties are more important to us than any friendship could possibly be.
22. Family members often answer questions that were addressed to another person.
28. Family members share almost all interests and hobbies with each other.
45. Family members have little need for friends because the family's so close.
75. Family members are expected to have the approval of other's before making decisions.
76. Family members are totally involved in each other's lives.
80. Family members feel pressured to spend most free time together.
82. Family members share the same friends.
86. It seems as if we agree on everything.
88. Family members know who will agree and who will disagree with them on most family matters.
109. Family members find it hard to get away from each other.
111. Family members feel they have to go along with what the family decision to do.

表2 FACESⅡのきずな項目 ((-) は反転項目)

1. Family members are supportive of each other during difficult times.
- (-) 3. It is easier to discuss problems with people outside the family than with other family members.
5. Our family gathers together in the same room.
7. Our family does things together.
- (-) 9. In our family, everyone goes his/her own way.
11. Family members know each other's close friends.
13. Family members consult other family members on their decision.
- (-) 15. We have difficulty thinking of things to do as a family.
17. Family members feel very close to each other.
- (-) 19. Family members feel closer to people outside the family than to other family members.
21. Family members go along with what the family decides to do.
23. Family members like to spend their free time with each other.
25. Family members avoid each other at home.
27. We approve of each other's friends.
- (-) 29. Family members pair up rather than do things as a total Family.
30. Family members share interests and hobbies with each other.

© David Olson (1982)

表3 FACESⅢのきずな項目 ((-) は反転項目)

1. Family members ask each other for help.
3. We approve of each other's friends.
5. We like to do things with just our immediate family.
- (-) 7. Family members feel closer to other family members than to people outside the family.
9. Family members like to spend free time with each other.
11. Family members feel very close to each other.
13. When our family gets together for activities, everybody is present.
- (-) 15. We can easily think of things to do together as a family.
17. Family members consult other family members on their decisions.
19. Family togetherness is very important.

© David Olson (1985)

「家族の絆 (family ties) はどんな友情よりももっと重要だ」(No. 20)、「家族に共通の友人がいる」(No. 82) などである。また、それ以外の項目についても家族のきずなというよりは、社会的に望ましいとされる家族のサポート (support) や親密さ (closeness) あらわすような項目内容が目立っている。

FACESⅡのきずな項目 (表2) では、FACESでいくつかみられたようなベッタリ項目が全くない。つまり、ここで言い表されている内容はまさに家族のサポートであり、親密さである。たとえば、「家族は困難な時にも助け合う」(No. 1)、「家

族は互いにとても親密だと感じている」(No. 17)、「家族は互いの友達を快く思っている」(No. 27) などである。ベッタリを測る項目としては、これらの内容に問題があると考えられる。

FACESⅢのきずな項目 (表3) でも、FACESⅡと同様にベッタリ項目がない。たとえば、「家族は互いに助けを求め合う」(No. 1)、「互いの友達を快く思っている」(No. 3)、「家族は互いにとても親密だと感じている」(No. 11) などである。やはり、サポートや親密さを問うもので、かつ抽象的な意味合いである。このように、FACESⅡとFACESⅢでは特に、きずなの項目内容は社会的

に望ましい中庸程度の家族特性を問うという傾向がみられた。つまり、これではきずなのカーブリーニア関係を測定できないのである。ここに栗本(1995)の指摘するような尺度上の問題、つまりライカート尺度の問題点が生じている。つまり、ライカート尺度で作られた項目は、すでにきずなならきずなのあるレベルの特性を表しているからである。ほとんどの項目が中庸なレベルの家族特性をあらわしていた場合、被験者がその項目に“almost always”と回答してもそれがベックリであるといえるほどきずなが高いことにはならない。

FES と FAM のきずな項目の検討.

代表的な家族アセスメント尺度である FES (Family Environment Scale) と FAM (Family Assessment Measure) の質問項目も検討した。FES は Moos (1974) によって作成された、自己報告式の家族環境尺度である。これは関係性次元 (Relationship Dimensions) ・人間的成長次元 (Personal Growth Dimensions) ・システム維持次元 (System Maintenance Dimensions) の 3

次元から総合的に評価するもので、関係性次元の操作的概念は、きずな (Cohesion)、表出性 (Expressiveness)、葛藤性 (Conflict) である。きずな項目の内容 (表 4) をみると、たとえば、「助けと支え (help and support)」(No. 1)、「思いやりの維持 (keep their feelings)」(No. 2)、「一体感 (feeling of togetherness)」(No. 31)、「支えあい (back each other up)」(No. 51) という内容で、FACES II や FACES III のきずな項目と似ている。つまり、ここでもきずな (cohesion) はサポートや思いやり、親密さ、一体感という意味あいでもとらえられているのである。

FAM は Skinner らによって作られた自己報告式の家族アセスメント尺度で、家族機能のプロセスモデルに理論的基盤をおいている。質問紙は家族全体について問う内容と、被験者との家族メンバーそれぞれとの二者関係について問う内容、そして家族のなかでの被験者個人の機能性を問う内容にわかれている。ここでは、家族全体について問う質問項目について検討する。操作的概念は、課題達成 (Task Accomplishment)、役割の遂行 (Role Performance)、コミュニケーション

表 4 FES のきずな項目

1. Family members really help and support one another.
2. Family members often keep their feelings to themselves.
31. There is a feeling of togetherness in our family.
51. Family members really back each other up.
72. We are usually carefull about what we say to each other.
81. There is plenty of time and attention for everyone in our family.

© Rudolf Moos (1974)

表 5 FAM のきずな項目 ((－) は反転項目)

General Scale
5. We feel loved in our family,
8. I don't see how any family could get along better than ours.
(－)13. When someone in our family is upset, we don't know if they are angry, sad, scared or what.
14. You don't get a chance to be an individual in our family.
17. I don't think any family could possibly be happier than mine.
26. My family and I understand each other completely.
(－)34. When someone is upset, we don't find out until much later.
35. We feel close to each other.
(－)45. When our family gets upset, we take too long to get over it.

© Harvey Skinner (1983)

(Communication)、感情表出 (Affective Expression)、感情的な巻き込まれ (Affective Involvement)、コントロール (Control)、価値と規範 (Values and Norms) である。しかし、項目内容から操作的概念を特定する際に、どれに当てはまるのか明確でない項目がみられた。項目検討の対象となるのは、操作的概念がコミュニケーション、感情表出、感情的巻き込まれの項目に関係している。しかし、コミュニケーションは基本的に他のすべての操作的概念を促進する機能を有すると考えて、項目検討外とした。また、感情表出はコミュニケーションと分かちにくいいため、これも項目検討外とした。従って、感情的巻き込まれを示す項目 (表5) について、検討を行った。これらの項目内容でもやはり、「愛情を感じる (feel loved)」(No. 5)、「互いに親密である (close to each other)」(No. 35)、などの内容である。しかし、いわゆるベッタリ (enmeshment) を表している項目内容もみられた。たとえば、「家族のなかで一人の個人 (individual) として存在することはない」(No. 14)、「家族は完全に互いを理解しあっている」(No. 26)、である。

FES と FAM の質問項目の検討の結果、きずなを問う項目は FACES シリーズと同様に、家族のサポートや親密さと同様な内容であった。つまり、家族のきずなは高ければ高い方がいいとされるような質問項目であった。ただ、FAM には家族メンバー間の境界が明確でない状態や、感情的な巻き込まれ、お互いに過剰に意識を向け合っている状態 (互いの完全な理解) についての項目内容がみられた。我々は、今回のアイテムプール作成できずなのベッタリ項目を先に述べたように定義し、ベッタリ項目が社会的に望ましいとされるような項目内容にならないように、具体的に行動レベルを問う質問紙を作成することが重要だと認識した。

FACESKIV・実年版作成の目的

FACESKIV・実年版を作成する目的は2つある。第一の目的は、これまで検証されてこなかったきずなのカーブリーニア仮説を検証することである。そのために、すでに述べたようにベッタリ家族を定義し、FACES シリーズと FES と

FAM のきずな項目を検討した上で、開発にとりかかった。第二の目的は、従来より行っているアルコール依存症家族研究を進めるために、平均的なアルコール依存症家族の家族ライフサイクルに合わせた、家族機能評価尺度が必要なことである。FACESKIV は思春期の子どもがいる家族を対象として開発されているもので、我々の進めるアルコール依存症家族研究で用いるには家族ライフサイクル上の問題で不適切だと考えた。たとえば、西川 (1995) のアルコール問題のある家族105名に行った調査では、アルコール依存症者である夫の平均年齢は53.5才、アルコール依存症者の妻の平均年齢は50.2才、第1子の平均年齢は24.3才であった。これは、明らかに思春期の子どもがいる家族とはいえない。そこで我々は尺度を開発するにあたって、第1子が20才代から30才代の家族と位置づけた。この時期は家族システムからの家族員の出入りが増大し、家族システム全体に二次的な変化が起こる。このような家族システムの変化について Minuchin は「多くの家族がライフサイクルの過程で一時的にベッタリやバラバラの状態になる傾向があり、また、子どもの成長と共にサブシステム間の境界は明確化しきずなは次第にバラバラになっていくべきである。」と述べている (武田・立木, 1989)。我々はオルソン円環モデルのきずな・かじとり両次元の操作的概念について検討の上、かじとりで不適切と思われた「しつけ」を削除した。

FACESKIV・実年版作成にあたって

構成概念妥当化パラダイム (Construct Validation Paradigm) の採用。

構成概念妥当化パラダイムは、1954年のアメリカ心理学会で紹介された「構成概念妥当性」についての議論をふまえて発展したもので、構成概念とその測定尺度を妥当化してゆく際の原則をまとめたものである (Cronbach and Meeh, 1955; Loevinger, 1957; Campbell and Fiske, 1959; Jackson, 1971; Wiggins, 1973; Messick, 1981; Skinner, 1981; Burisch, 1984; Tatsuki, 1985; 池埜ら・立木, 1990; 大塚・立木, 1991; 武田・立木, 1991)。このパラダイムは、家族機能に関する理論モデルの検討と評価尺度開発の両面を統合

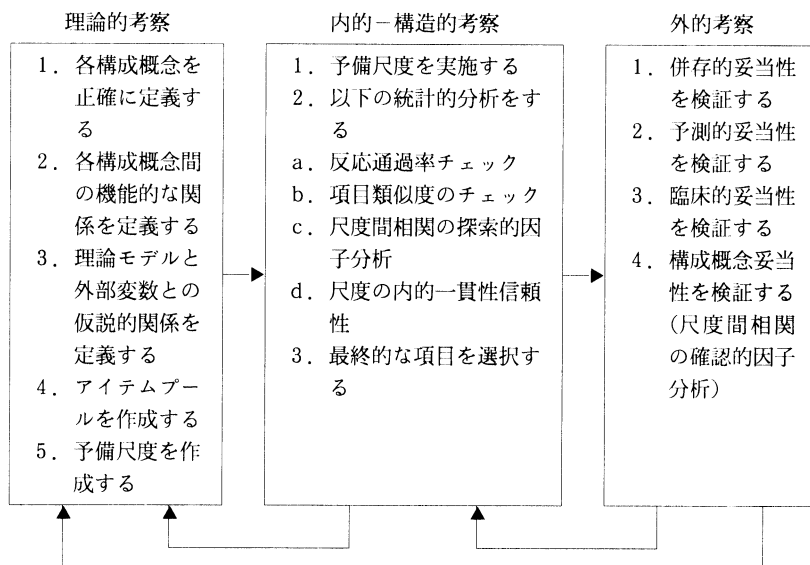


図2 サーストン尺度作成のための構成概念妥当化パラダイム

できることから、FACESKG シリーズでは Loewinger (1957) による 3 段階のパラダイムを採用してきている。

構成概念妥当化過程の 3 段階とは、理論的考察段階、構造的・内的考察段階、外的考察段階である(図2)。我々は理論的考察段階でオルソンの円環モデルに関する文献を読み、きずな・かじとりの各操作的概念を検討した上で明確に定義し、カーブリニア仮説を想定し、両次元の項目を十分な数用意した。構造的・内的考察の段階では、尺度を被験者に実施し、項目の反応通過率・双対尺度法・因子分析による項目分析を行った。さらに、外的考察の段階では、多特性・多方法行列データによる構造方程式モデルから構成概念妥当性を検証し、ASTWA (Addiction Screening Test for Wives of Alcoholics) を用いてカーブリニア仮説を検証した。

サーストン尺度の採用

FACESKG IV・実年版の開発にあたっては、FACESKG III と同様にサーストン尺度を採用した。サーストン尺度は等現間隔尺度ともいわれ、物理的測定の器具と同じようにあらかじめ目盛りのついた尺度を作成し、それによって態度を測定するものである(井上ら, 1995)。ライカート尺度(相加評定尺度)が調査対象者の回答に尺度の基

礎をおき、個人の態度はその時の回答者集団の結果に基づいた相対的な位置としてあらわれるのに対し、サーストン尺度は、一群の判定者に分類させることによってある程度、絶対的な尺度を求めようとするものである。

アイテムプール作成段階での項目内容の留意点

カーブリニア仮説の検証のため、アイテムプール作成段階できずな・かじとり両次元の下位概念を 8 段階のレベルに忠実に作成した。その際、特にきずな次元で FACESKG III と同様に、高ければ高い方がいいとされる、家族サポート度や親密度ではなく、きずな(Cohesion)を測る内容となるよう具体的で行動レベルを問う項目内容とした。

方 法

アイテムプールの作成

2 名がアイテムプールを作成した。きずな項目 443 項目・かじとり項目 166 項目の合計 609 項目を作成した。

予備尺度の作成

準備したアイテムプール項目の精選を行った。これは、きずな・かじとりのそれぞれの項目が、

1点から8点のどのレベルにあたると思うかを評定者に評定してもらい、事前に各項目に与えた得点の妥当性を評価した。評定は2度行い、第一次評定は1995年12月20日から1996年1月15日にかけて、立木研究室大学院生2名、ソーシャルワーカー1名によって行われた。想定したレベルと評定者1人でも違った場合は、その項目を削除した。また、評定者から項目の内容にダブルバレル等の指摘のあった項目についても検討のうえ削除した。第二次評定は1996年1月17日から2月13日にかけて、1995年度家族システム論（立木茂雄教授）に出席する学生22人によって行われた。それぞれの項目の評定の分散を求め、分散が大きい場合は特定のレベルを反映していないと判断し、その項目を削除した。この段階で、きずな50項目・かじとり33項目の合計83項目が残った。

本調査

予備尺度の項目をさらに精選するために、関西学院大学社会学部同窓生の両親を対象に調査を実施した。同窓名簿から同窓生が20才代から30才代にあたる人を対象に、クラスター標本抽出で1023家族を選び出し、その家族に往復ハガキで調査の協力依頼を行った。そして、協力に承諾していただいた348家族に対して郵送調査をした。質問紙は父親版と母親版を用意し、質問項目は母親の立場にたって作成しているので父親版は母親版のワーディングを変更して作成した。父親版・母親版ともきずな50項目とかじとり33項目である。期間は1996年6月21日から7月14日である。

結 果

サンプルの属性

配布したのは348組で回収できたのは291組、回収率は83.6%であった。両親そろっての回答がないものや、5項目以上未回答があるサンプルは除いた。その結果、有効回答は221家族であった。父親の立場の被験者は平均年齢が58.1歳で、51歳から60歳までが71.1%、61歳から70歳までが25.7%であった。母親の立場の被験者は平均年齢が54.3歳で、51歳から60歳までが80.3%、41歳から50歳までが13.3%であった。子どもの平均年齢は28.5

歳で、26歳から30歳が57.8%、31歳から35歳が23.4%、21歳から25歳までが17.0%であった。また、一 가족の子ども的人数は2人が最も多く64.2%で、次いで3人が29.4%、1人が5%であった。調査時点での子どもとの同居形態は、同居する子どもがいる45.4%で、子ども全員と別居が36.7%、子ども全員と同居が16.1%であった。

反応通過率による項目分析

きずな次元のサラリ・ピッタリ、かじとり次元のきっちり・柔軟の中庸レベルにおいてほとんどの回答者が同じ回答をする項目は弁別性に乏しい。そこで各次元の中庸レベル（レベル3～6）で全被験者の95%以上が「はい」か「いいえ」のどちらかに偏って回答している項目は削除した。その際、極端レベル（レベル1・2・7・8）については極端な家族機能を測るために、反応通過率を用いた項目の削除を行わなかった。この段階で、父親版3項目、母親版2項目が削除された。

双対尺度法による重みの算出

尺度全体の信頼性のひとつに「項目の類似性」がある。例えば、きずな次元において、バラバラ1の項目に「はい」と答える人はバラバラ2の項目に「はい」と答える確率は高くなければいけない。しかし、バラバラ1とベッタリ8の項目に同時に「はい」と答える確率は低くならなければならない。この類似性を検証するために双対尺度法を採用した。各項目の数量化を行い、得られた重みの差異を類似性の指標とした。その結果、きずな次元ではバラバラ1・バラバラ2・サラリ3・サラリ4に正の値、ピッタリ5・ピッタリ6・ベッタリ7・ベッタリ8に負の値、かじとり次元では融通なし1・融通なし2・てんやわんや7・てんやわんや8に正の値、キッチリ3・キッチリ4・柔軟5・柔軟6に負の値が与えられた。従って、例えばバラバラ1は正の値を与えられているにも関わらず、負の値を与えられているようなバラバラ1の項目は削除した。この結果、父親版はきずな2項目・かじとり3項目削除し、母親版はきずな21項目・かじとり6項目削除した。この段階で父親版はきずな45項目、かじとり30項目、母親版はきずな27項目、かじとり27項目が残った。

因子負荷量による項目の精選

より内的妥当性の高い項目を残し洗練された尺度にするために、父きずな・父かじとり・母きずな・母かじとりの4つの総得点を変数として、探索的因子分析を行った。そして、パッリマクス回転後の因子負荷量から項目の精選を行った。その際、次の3つの基準にひとつでも当てはまる場合、その項目を削除した。1) ある項目を削除する

表 6 父親版・母親版それぞれのきずな・かじとりの因子分析

	因子 1	因子 2	コミュナリティ
母親きずな	.8920	.0415	.7973
父親きずな	.8835	-.0654	.7849
父親かじとり	.0485	.8413	.7101
母親かじとり	-.0710	.8295	.6932
アイゲンバリュー	1.5917	1.3939	
%	39.8%	34.9%	

表 7 父親版・母親版それぞれのきずな・かじとりの相関分析

母親きずな	1.0000			
母親かじとり	-.0500	1.0000		
父親きずな	.5793*	-.0538	1.0000	
父親かじとり	.0738	.3978*	-.0475	1.0000
n=221 *p< .001				

と結果的にきずな・かじとりの2因子構造以外、すなわち1因子や3因子構造が出る、2) ある項目を削除する前と後を比較すると4つの変数のコミュナリティーが下がる、3) 当該因子での因子負荷量が小さくなる。また、きずな次元、かじとり次元ともに、各レベルの項目がほぼ同数になるようにした。その結果、父親版のきずな27項目・かじとり14項目、母親版のきずな11項目・かじとり12項目を削除した。以上の手続きで、父親版はきずな18項目・かじとり16項目の合計34項目、母親版はきずな16項目・かじとり15項目の合計31項目が残った。この最終項目による、探索的因子分析と相関分析の結果は表6と表7である。

表 8 父親版・きずなの分布

Variable=FKIZ			
Moments			
N	221	Sum Wgts	221
Mean	1.506787	Sum	333
Std Dev	5.77071	Variance	33.30109
Skewness	-0.56359	Kurtosis	0.681096
USS	7828	CSS	7326.24
CV	382.981	Std Mean	0.38818
T : Mean=0	3.881672	Pr> T	0.0001
Num=0	205	Num>0	132
M(Sign)	29.5	Pr>= M	0.0001
Sgn Rank	3712.5	Pr>= S	0.0001

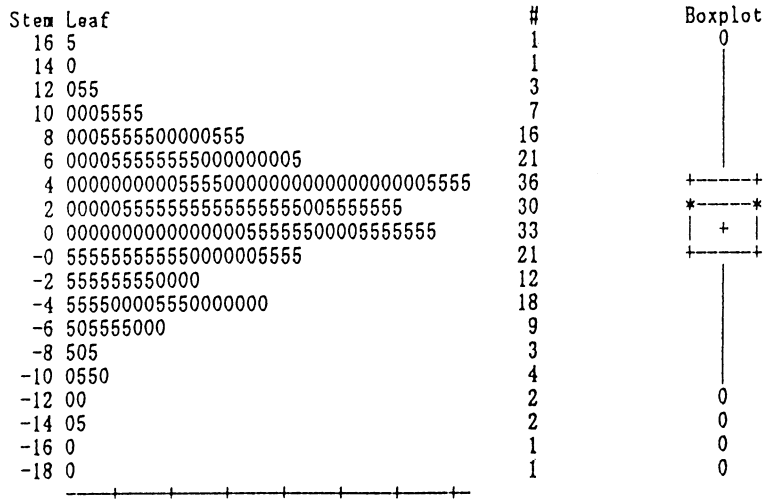


図 3 父親版・きずなの分布図

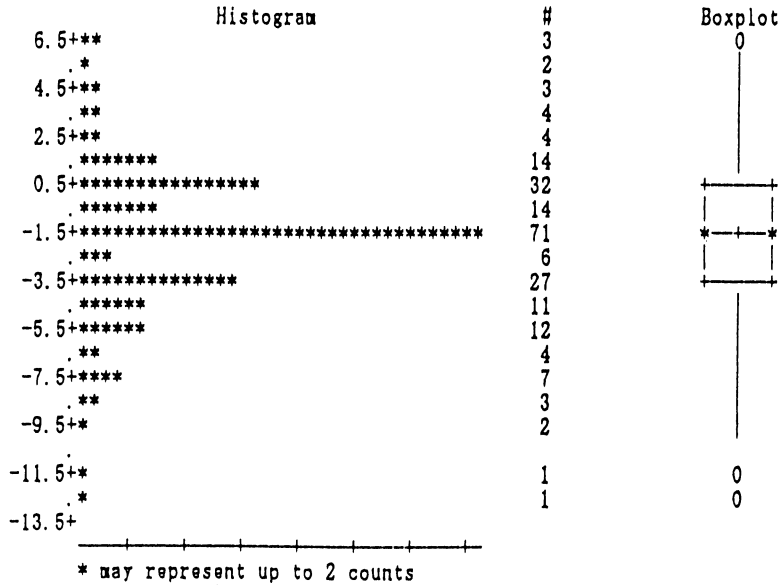


図4 父親版・かじとりの分布図

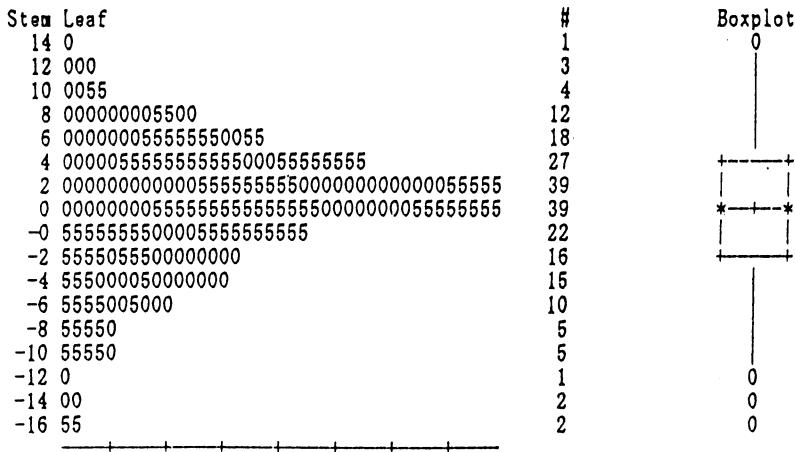


図5 母親版・きずなの分布図

表9 父親版・かじとりの分布

表10 母親版・きずなの分布

Variable=FKAJ				Variable=MKIZ			
Moments				Moments			
N	221	Sum Wgts	221	N	221	Sum Wgts	221
Mean	-1.94344	Sum	-429.5	Mean	0.88914	Sum	196.5
Std Dev	3.096217	Variance	9.586559	Std Dev	5.456245	Variance	29.77061
Skewness	-0.34238	Kurtosis	1.262929	Skewness	-0.60295	Kurtosis	0.889485
USS	2943.75	CSS	2109.043	USS	6724.25	CSS	6549.534
CV	-159.316	Std Mean	0.208274	CV	613.654	Std Mean	0.367027
T : Mean=0	-9.33116	Pr > T	0.0001	T : Mean=0	2.422549	Pr > T	0.0162
Num=0	198	Num > 0	39	Num=0	213	Num > 0	135
M(Sign)	-60	Pr > = M	0.0001	M(Sign)	28.5	Pr > = M	0.0001
Sgn Rank	-6926	Pr > = S	0.0001	Sgn Rank	2937	Pr > = S	0.0010

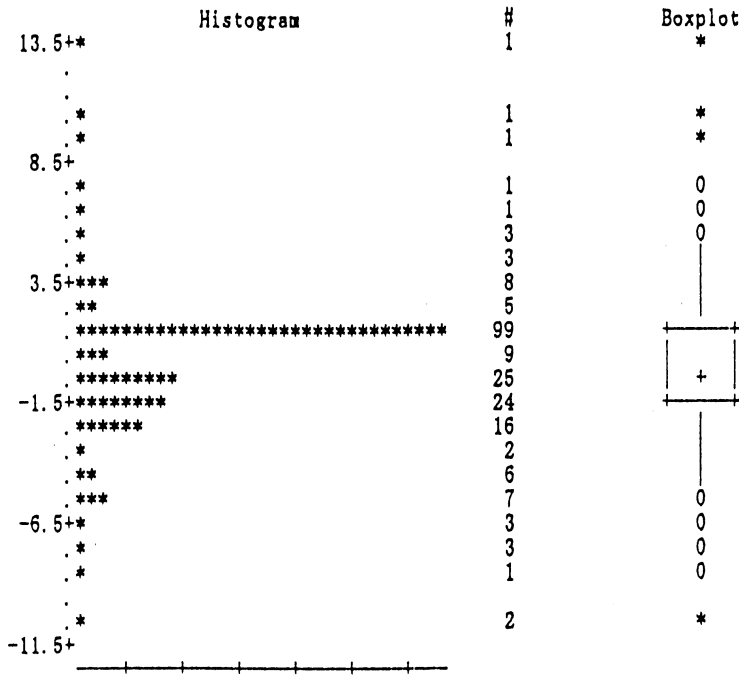


表 6 母親版・かじとりの分布図

表 11 母親版・かじとりの分布

Variable=MKAJ

Moments			
N	221	Sum Wgts	221
Mean	-0.13348	Sum	-29.5
Std Dev	3.019868	Variance	9.119601
Skewness	-0.1725	Kurtosis	3.410381
USS	2010.25	CSS	2006.312
CV	-2262.34	Std Mean	0.203138
T : Mean=0	-0.65711	Pr> T	0.5118
Num=0	217	Num>0	128
M(Sign)	19.5	Pr>= M	0.0097
Sgn Rank	248	Pr>= S	0.7871

最終項目のきずな・かじとりの分布図

項目精選の一連の段階を経て、最終的に残った項目での父親版と母親版の、きずなかじとりそれぞれの分布は次のとおりであった。父親版・きずなでは、平均値が1.51で標準偏差が5.77で、ほぼ正規分布であった（表 8、図 3）。父親版・かじとりは、平均値が -1.94で標準偏差が3.10で、これもほぼ正規分布であった（表 9、図 4）。母親版・きずなは、平均値が0.89で標準偏差が5.46で正規

分布であった（表10、図 5）。母親版・かじとりは、平均値が -0.13で標準偏差が3.02で、ヒストグラムをみるとある得点で度数が突出している（表 11、図 6）。

多特性・多方法行列

最後に、構成概念妥当性の検証を行った。構成概念妥当性は、収束的妥当性と弁別的妥当性を検証することによって得られる。ここでは、多特性・多方法行列データによる構造方程式モデルを用いて検定を行った。多特性・多方法行列では、それぞれの観測値はひとつの特性因子とひとつの方法因子、および測定誤差によって説明されると仮定する。特性の構造と方法の構造を示したモデルの分類は表12のとおりである。モデルは徐々に方法と特性の構造を複雑にして、モデルの適合度を比較し、もっとも適合度の高いモデルを採用する。本研究の場合、方法因子は母親・父親であり、特性因子はきずな・かじとりで、各モデルの適合度は表13のとおりである。

この結果、最も適合度の良かったモデルは2' Bであった（図 7）。しかし、これは方法因子から父

表 12 多特性・多方法行列データによる構造方程式モデルの分類

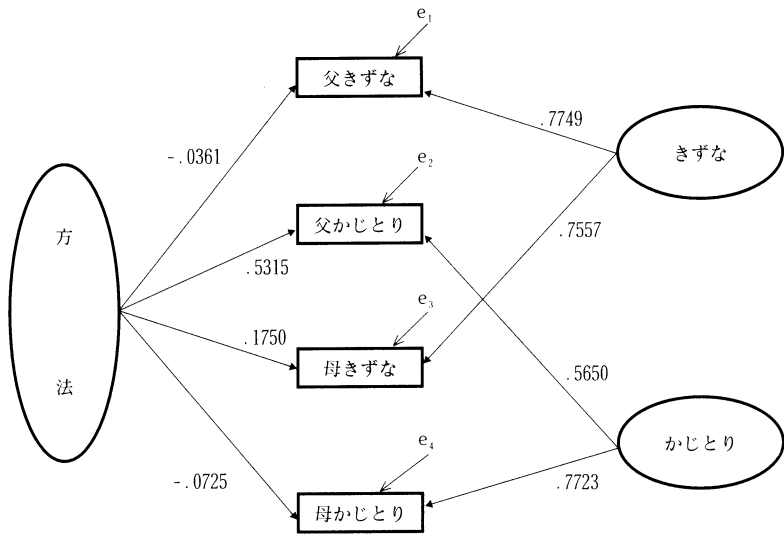
特性の構造		方法の構造			
	A	B	B'	Cn	C
1	null model	方法因子が一つ	m 個の方法因子、因子間相関なし	m 個の方法因子*	m 個の方法因子、因子間相関あり
2	特性因子が一つ、方法因子なし	特性と方法の2因子	特性因子が一つ、 m 個の方法因子、因子間相関なし	特性因子が一つ、 m 個の方法因子*	特性因子が一つ、 m 個の方法因子、因子間相関あり
2'	t 個の特性因子、因子間相関なし、方法因子なし	方法因子が一つ、t 個の特性因子、因子間相関なし	t 個の特性因子、 m 個の方法因子、因子間相関なし	t 個の特性因子（相関なし）、m 個の方法因子*	t 個の特性因子（相関なし）、m 個の方法因子（相関あり）
3	t 個の特性因子、因子間相関あり、方法因子なし	方法因子が一つ、t 個の特性因子（相関あり）	t 個の特性因子（相関あり）、m 個の方法因子（相関なし）	t 個の特性因子（相関あり）、m 個の方法因子*	t 個の特性因子（相関あり）、m 個の方法因子（相関あり）

*：方法のうち n 個は相関し、m - n は直行する。n < m

表 13 多特性多方法行列による構造方程式モデルの適合度

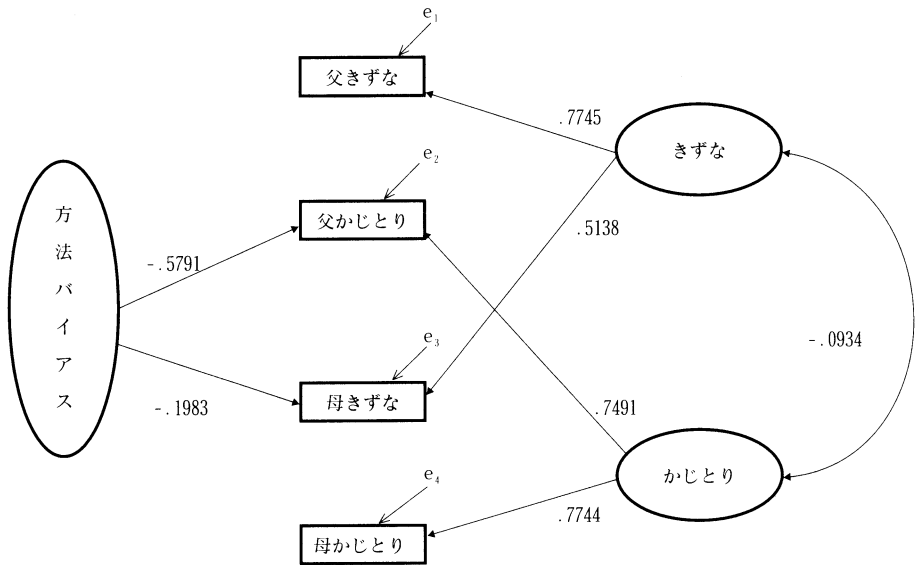
	特性因子	方法因子	X ²	df	Prof.	GFI	AGFI	AIC
1A	なし	なし	133.5355	9	.0001	.7977	.7753	115.5555
1B	なし	1	90.8217	5	.0001	.8248	.6497	80.8217
1B'	なし	m 個で因子間相関なし	132.4879	5	.0001	.7975	.5951	122.4879
1C	なし	m 個で因子間相関あり				収束せず		
2A	1	なし				収束せず		
2B	1	1				収束せず		
2B'	1	m 個で因子間相関なし	37.8297	1	.0001	.9268	.2679	35.8297
2C	1	m 個で因子間相関あり	22.7459	1	.0001	.9542	.5420	20.7459
2' A	t 個で因子間相関なし	なし	12.7278	5	.0261	.9726	.9453	2.7278
2' B	t 個で因子間相関なし	1	.7223	1	.3954	.9984	.9836	-1.2777
2' B'	t 個で因子間相関なし	m 個で因子間相関なし				収束せず		
2' C	t 個で因子間相関なし	m 個で因子間相関あり	1.2175	1	.2699	.9972	.9725	-.7825*
3A	t 個で因子間相関あり	なし	12.5738	6	.0136	.9729	.9323	4.5738
3B	t 個で因子間相関あり	1	77.2153	2	.0001	.8761	.3805	73.2153**
3B'	t 個で因子間相関あり	m 個で因子間相関なし	.9596	1	.3273	.9978	.9783	-1.0404***
3C	t 個で因子間相関あり	m 個で因子間相関あり				収束せず		

注：父親と母親のきずな・かじとりの測定誤差を、同一のものに固定している。
*：L-11（方法・父から観測データ・父きずなの因果係数）を 1.00 に固定している。
**：L-11 と L-21（方法・父から観測データ・父きずなの因果係数）を 1.00 に固定している。
***：L-11 を 1.00 に固定している。



注：父親と母親のきずな・かじとりの測定誤差を同一のものに固定している

図 7 モデル2' B のパス図とそのパス係数



注：父親と母親のきずな・かじとりの測定誤差を同一のものに固定している

図 8 最終モデルのパス図とそのパス係数

表 14 最終モデルの適合度

X ²	df	Prof	GFI	AGFI	AIC
0.0355	2	0.9824	0.9999	0.9996	-3.9645

注：父親と母親のきずな・かじとりの測定誤差を同一のものに固定している

表 15 因果係数の有意性

特性因子→観測変数	因果係数(推定値)	標準誤差	t 値	標準化解
きずな→父きずな	.7745	.0619	12.5151	.7745
きずな→母きずな	.7498	.0631	11.8818	.7491
かじとり→父かじとり	.5138	.0803	6.3945	.5138
かじとり→母かじとり	.7743	.0658	11.7592	.7744

表16 父親版・母親版のそれぞれの
きずな・かじとりの R²

	R ²
父きずな	.5997
父かじとり	.5996
母きずな	.6004
母かじとり	.5996

注：父親と母親のきずな・かじとりの測定誤差を同一のものに固定している。

表 17 父親版・母親版それぞれのカッティングポイント

	きずな	バラバラ	サラリ	ピツタリ	ベツタリ
父親版		-18.5～-4.1	-4.0～0	0.1～4.0	4.1～18.5
母親版		-18.0～-2.6	-2.5～0	0.1～3.0	3.1～16.0
	かじとり	融通なし	キッチリ	柔軟	てんやわんや
父親版		-16.0～-4.1	-4.0～0	0.1～2.5	2.6～18.0
母親版		-14.5～-2.6	-2.5～0	0.1～3.5	3.6～19.0

きずなに出ている因果係数と、方法因子から母かじとりに出ている因果係数が有意ではなかったの
で、再度それを取り除き適合度をみた（図8）。その結果、さらに適合度が良くなった（表14）。また、このモデルはt 値が全て1.96以上で有意であった（表15）。

尺度の決定係数

R² から尺度の信頼性を検証する。値は0 から1の間で決定され、1に近いほど誤差が少ないことを示している。すなわち、各下位尺度の信頼係数といえる。

カッティングポイント

サーストン尺度の場合、カッティングポイント
は理論値として求めることが可能である。なぜなら、一つ一つの項目にあらかじめある得点が与えられているからである。我々はこの理論値に基づいてカッティングポイントを決定した。きずな・かじとりそれぞれの4つのレベルを判別する4つのカッティングポイントは、0（ゼロ）をはさんで、マイナスとプラスに位置するように得点が与えられているので、0（ゼロ）をはさんだ双方向で、各得点をそれぞれ質問項目数だけ乗じたものを加算することで求めることができる。結果は表17のとおりである。

カーブリニア仮説の検証

今回、我々はカーブリニア仮説を検証するために、本調査においてFACESKG IVにあわせてASTWA（Addiction Screening Test for Wives of Alcoholics）を実施した。ASTWA とは猪野ら（1992、1994）が開発したもので、アルコール依存症の夫をもった妻の嗜癖傾向を測定するスクリーニングテストである。下位尺度は1（夫への）支配傾向、2（夫への）巻き込まれ傾向、3（夫への）世話焼き傾向、4 完全主義傾向、5 自尊心の低い傾向である。このスクリーニングテストの結果では総得点の高い人ほど、嗜癖傾向が高い。従ってFACESKG IVの結果を、ASTWA の結果とあわせ見れば理論的にはカーブリニア関係にあると考えられる。

実施したのは、本調査の対象である被験者のうち妻の立場の被験者221名である。結果はきずなの4 レベル（バラバラ、サラリ、ピツタリ、ベツタリ）ごとのASTWA 得点の平均点と中央値は表18、かじとりの4 レベル（融通なし、キッチリ、柔軟、てんやわんや）ごとのASTWA 得点の平均点と中央値は表19に示した。また、FACESKG IVの母きずなの4つのレベルごとにみたASTWA の得点（図9）と、FACESKG IVの母かじとりの4つのレベルごとにみたASTWA の得点を箱ひげ図で表した（図10）。

表 18 きずな 4 レベルごとの ASTWA 得点

きずな ASTWA	人数	平均点	中央値
バラバラ	45	36.7	35.0
サラリ	41	35.4	35.0
ピッタリ	65	35.3	34.0
ベツタリ	70	37.2	37.0

表 19 かじとり 4 レベルごとの ASTWA 得点

かじとり ASTWA	人数	平均点	中央値
融通なし	30	38.4	39.0
キッチリ	63	37.4	37.0
柔軟	117	35.2	34.0
てんやわんや	11	34.5	35.0

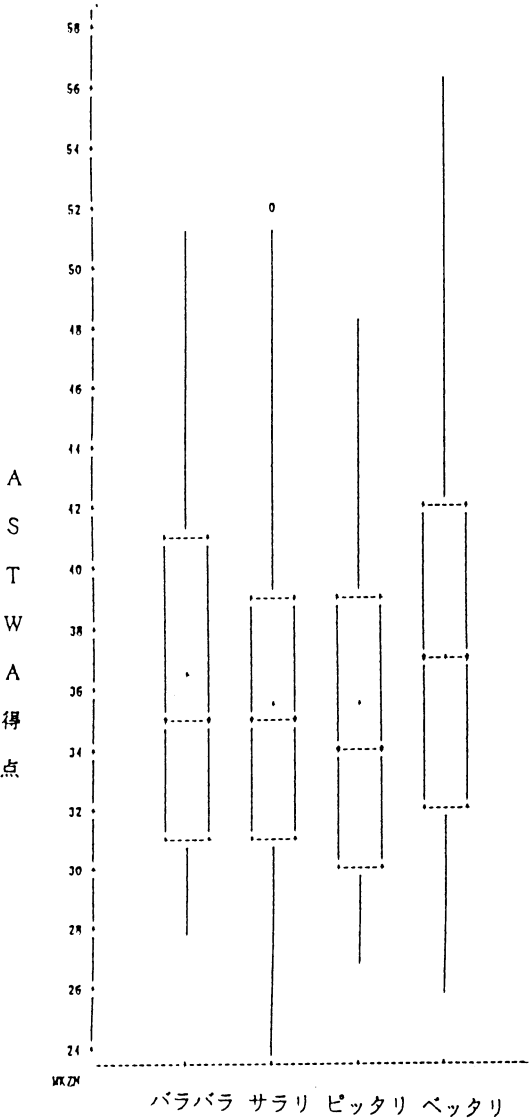


図 9 母きずな得点と ASTWA 得点の箱ひげ図

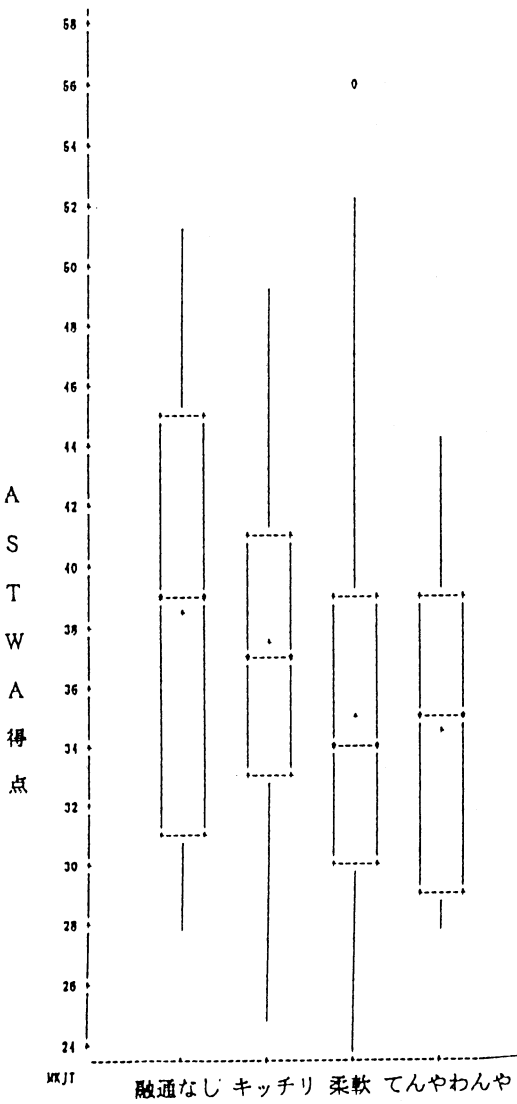


図 10 母かじとり得点と ASTWA 得点の箱ひげ図

FACESKGIV・実年版のきずな・かじとりそれぞれの各レベルでみた ASTWA 得点は、僅差ではあるが、カーブリニア関係がみられた。つまり、きずなでは、極端レベルのバラバラとベッタリが、中庸レベルのサラリとピッタリに比べて、ASTWA 得点が高かった。かじとりでは、極端レベルの融通なしが中庸レベルのキッチリと柔軟より、ASTWA 得点が高かった。しかし、もう一方の極端レベルであるてんやわんやは、柔軟よりは ASTWA 得点が高かったものの、キッチリと比べると ASTWA 得点が低かった。

以上の結果から、今まで実証されてこなかったきずなのカーブリニア仮説が、ASTWA 得点との関係で実証できたといえる。考察では、きずなと ASTWA 得点とのカーブリニア関係を引き出した要因について述べる。

考 察

カーブリニア仮説の検証について

今回開発した FACESKGIV・実年版では、すでに結果で述べたように、きずなのカーブリニア仮説が ASTWA 得点との関係で実証された。この結果は次のような要因によると考えられる。まず第一に、これまでの FACES シリーズのきずな項目の内容は、家族のサポート度や親密度を問うような、高ければ高い方がいいとされる内容に特徴づけられるのではないかと考えた。そこで本研究では、きずなの最も高いレベルのベッタリ (enmeshment) 家族についてレビューし、定義した。ここで明確になったのは、家族成員間のあいまいな境界であり、互いにからみあい (inter-

twined)、織りまぜあい (interwoven)、過剰な巻き込まれ (overinvolved)、気を取られている (preoccupied) 状態の家族 (Sauer, 1982) である。このように、ベッタリ家族を明確に定義したことを、アイテムプール作成に反映させたことがひとつの大きな要因になっていると思われる。第二に、FACES シリーズのきずな項目を検討し、これまでのカーブリニア仮説が実証されてこなかった原因を特定したことである。つまり、我々の予想したように、きずなの項目内容はいわゆるベッタリ (enmeshment) ではなく、家族のサポートや親密さ、一体感、思いやり、といった社会的に望ましい家族の暖かさを測っていたのである。これでは、きずなでカーブリニア仮説が実証されない。第三に、アイテムプール作成の段階において、ベッタリの定義に基づき、より行動レベルで具体的な項目作成を心がけたことがある。我々の作成したベッタリ項目で、最終的に残ったものは表20のとおりである。長子が20歳代から30歳代の家族にとってみれば、「家族と過ごす時間が非常に長い」、「家族の誰かが帰るまでみんな起きて待っている」、「親子で腕を組んで買い物に行く」、「休日はいつも家族と過ごす」、「互いの体によく触れる」、「一緒にお風呂にはいる」、という行動は普通考えられない。また、父親版では「妻が苦しんでいるのをみると妻以上に自分が苦しくなる」といった感情的な巻き込まれは、夫婦間の境界のあいまいさを表している項目である。

また、かじとりの4レベルと ASTWA 得点は結果で述べたように、極端レベルの融通なしが中庸レベルのキッチリと柔軟よりは、ASTWA 得点が高かったが、もう一方の極端レベルのてんや

表 20 FACESKGIV・実年版のベッタリ項目

父親版	私の生活の中では家族と過ごす時間が非常に多い 何かで妻が苦しんでいるのをみると妻以上に自分が苦しくなる 誰かの帰りが遅い時には、その人が帰るまでみんな起きて待っている 子どもと腕を組んで買い物に行くことがある 休日はいつも家族全員で一緒に過ごす
母親版	休日は家族といるのが一番だ 家族はお互いの体によくふれ合う 休日はいつも家族全員で一緒に過ごす 我が家は親子でよくお風呂に入る

わんやとは柔軟よりは ASTWA 得点が高かったものの、キッチリと比べると ASTWA 得点が低かった。これは、てんやわんやに布置する被験者の数が他のレベルと比べてかなり少なかったことから一概に言えないが、ASTWA を用いたことによるのではないかと考える。つまり、ASTWA とは密着した病理度の高い対人関係性を問う尺度であるため、相互にかなり関与しあった状態を想定している。しかし、かじとりのてんやわんやとはリーダーシップがなく、問題解決も小田原評定的であり、明確な役割分担がないという状態を意味している。従って、てんやわんや家族は家族メンバー相互にそう密着した関係にあるとは思えない。このような理由で、かじとりのてんやわんやは ASTWA 得点が高くならなかったと考えられる。

ベッタリ (enmeshment) 家族を測定する際の問題について

今回、ベッタリ (enmeshment) 家族を測定するために、すでに述べたように理論的考察に戻ってベッタリ概念の検討、これまでの FACES シリーズ等の項目検討を行い、尺度を作成し、きずなのカーブリニア仮説が ASTWA 得点との関係で実証できた。しかし、ベッタリ項目の作成段階では難しさも伴った。つまり、ベッタリの状態とは、逸脱した特殊な状態を示す項目内容となるため、被験者はたとえその状態に当てはまったとしても、「はい」と答えるににくいことが予想されるからである。ここに、自己報告式の測定尺度の難しさがあるといえる。従って、項目作成の段階で、被験者の価値観や感情などを問う項目を避け、行動レベルの問題を具体的に問うことで、それらの問題を最小限に抑える配慮が重要である。

今後の FACESKGIV・実年版を用いたカーブリニア仮説検証について

これまで、オルソン円環モデルに基づいた FACES シリーズあるいは FACESKG シリーズを用いた調査では、きずなのカーブリニア仮説が実証されていない中、今回の結果ではそれが実証されたことの意義が大きい。しかし、今回の結果だけでは、きずなのカーブリニア仮説を受け入れ

るには困難がある。なぜなら、きずなの 4 レベルと ASTWA 得点の間には、カーブリニア関係がみられたものの、弱いカーブリニア関係であったからである。従って、FACESKGIV・実年版と ASTWA を用いて、さらに調査を行って検証していくことが必要である。また、ASTWA 以外の心理社会的測定尺度との関連でカーブリニア仮説を検証していくことも重要であろう。

父親と母親の回答バイアスの性質について

最終的に採用したモデル (図 8) できずな・かじとり両次元の独立性をみると、相関が -0.093 と無視できるほど小さかったことから、統計的にはほぼ独立していると見なせることができる。

また、このモデルは父親はかじとりがマイナス方向に、母親はきずながマイナス方向に、それぞれバイアスがかかっているといえる。つまり、父親はかじとり次元について実際よりも低く認知する傾向があり、母親はきずな次元について実際よりも低く認知する傾向がある。これは、父親がリーダーシップをとり母親が情緒的なつながりを保つという被験者のステレオタイプの家族のとらえ方に影響されているからだと考える。これらのバイアスは、Hampson と Beavers (1987) の指摘にあるように、女性と男性の社会化のされかたによると考えられる。つまり、親によって女性は感情表出やよい家族関係を保つことが家族生活の特徴だとみなすように社会化され、男性は家族の高い組織性やリーダーシップを家族機能の重要な要因であるとみなすように社会化されているのである。

本調査のサンプルについて

今回の本調査サンプルは、関西学院大学社会学部同窓生の両親であり、このサンプルが我が国の標準的な家族を代表しているとはいえない。従って今後さらなる調査が求められる。

アルコール臨床における FACESKGIV・実年版の活用について

FACESKGIV・実年版の作成の目的の一つは、アルコール臨床における家族アセスメント尺度を必要としていることにある。多くのアルコール治

療機関や保健所などでは、アルコール依存症者のみならず、配偶者や母親、さらには子どもや関係者に対して介入を行っている場合が多く、そこでは経験的に培われた臨床的知見や、知り得た知識をもとに実践を行っている。そこでは、介入が本当にクライアントにとって有効であったのか、あるいはどのような変化があったのかという評価は、介入者の主観的判断でなされていることがほとんどである。しかし、介入者は主観の評価に加え、なんらかの客観の評価を用いて、より効果的な介入を目指すことが必要である。そこで、アルコール依存症家族への介入のための初期アセスメント指標や、介入の効果測定のアセスメント指標として、信頼のおける尺度が必要なのである。Kaufman (1985) も、アルコール飲料など物質乱用 (substance abuse) の分野での研究をレビューし、今後の課題は、家族システムの研究と、治療のテクニックやその効果の科学的評価が挙げられるとして、家族システムの計量的評価と、家族治療の臨床評価をするための方法が確立しなければならないと述べている。今回、開発したオルソン円環モデルに基づいた FACESKG IV・実年版は、そのための信頼できるアセスメント尺度となりうるものである。

アルコール依存症家族への介入とは、言い換えるとアルコール依存を抱えた家族システムへの介入であると考え、介入前に家族システムが全体としてどのような機能状態にあるのかを、FACESKG IV・実年版で評価し、把握しておくことは非常に重要である。また、介入後に家族の機能状態がどのように変化したかを知るために、同様に FACESKG IV・実年版で評価することが可能である。しかし、介入が家族機能の変化の直接の要因だと判断するには、調査の一連の状況を整えなければならないのは言うまでもない。それには、臨床の場面での困難が伴うと予想されるが、最大限の配慮をした上で、介入の有効性を明らかにしていくことが重要だと考える。

参考文献

- Barker, P. (1993). *Basic Family Therapy*. Oxford University Press, New York. (中村伸一・信国恵子監訳、「家族療法の諸学派」、『家族療法の基礎』、金剛出版、88-114.)
- Barnhill, L. R. (1979). Healthy family systems. *The Family Coordinator*, 28 (1), 94-100.
- Doherty, W. J. and Hovader, D. (1991). Why don't family measures of cohesion and control behave the way they're supposed to?. *The American Journal of Family Therapy*, 18 (1), 5-18.
- Dundas, I. (1994). The family adaptability and cohesion scale III in a norwegian sample. *Family Process*, 33, 5-18.
- Green, R. G., Harris, R. N. Jr., Forte, J. A. and Robinson, M. (1991a). Evaluating FACESIII and the circumplex model: 2440 families. *Family Process*, 30, 55-73.
- Green, R. G., Harris, R. N. Jr., Forte, J. A. and Robinson, M. (1991b). The wives data and FACESIV: Making things appear simple. *Family Process*, 30, 79-83.
- Green, R. G. (1989). Choosing family measurement devices for practice and research: SFI and FACESIII. *Social Service Review*, 63, 304-320.
- Haggerty, J. J. (1983). The psychosomatic family : An overview. *Psychosomatics*, 24 (7), 615-623.
- Hampson, R. B. and Beavers, W. R. (1987). Comparing male's and females' perspectives through family self-report. *Psychiatry*, 50, 24-30.
- 平尾桂・福永英彦・松岡克尚・立木茂雄 (1992) 「オルソン円環モデルの構成概念妥当性に関する理論的・実証的研究 (VI) : FACESKG II と SIMFAMKG の開発にいたるまでの研究展望」、『関西学院大学社会学部紀要』、66、97-117.
- 池埜 聡・武田 丈・倉石哲也・大塚美和子・石川久展・立木茂雄 (1990) 「オルソン円環モデルの理論的・実証的検討—構成概念妥当化パラダイムからのアプローチ」、『関西学院大学社会学部紀要』、61、83-119.
- 磯田朋子・清水新二・大熊道明 (1987) 「円環モデルをめぐる諸問題—モデルの生成・発展の過程—」、『家族療法研究』、4 (1)、27-40.
- 猪野亜朗・大越崇・杉野健二・志村正美 (1992) 「アルコール依存症の夫を持つ妻と嗜癖傾向」『アルコール研究と薬物依存』、27 (3)、313-333.
- 猪野亜朗・杉野健二・志村正美 (1994) 「アルコール依存症の夫を持つ妻と嗜癖傾向」『アルコール研究と薬物依存』、29 (2)、121-138.
- 井上文夫・井上和子・小野能文・西垣悦代 (1995) 「測定尺度の構成」、『よりよい社会調査をめざして』、創元社、106-116.
- Kaufman, E. (1985). Family systems and family therapy of substance abuse: An overview of two

Barker, P. (1993). *Basic Family Therapy*. Oxford University Press, New York. (中村伸一・信国恵子監訳、「家族療法の諸学派」、『家族療法の基礎』、金剛

- decades of research and clinical experience. *The International Journal of the Addictions*, 20 (6&7), 897-916.
- 栗本かおり (1995)『FACESKGⅢ作成の試み』、関西学院大学大学院社会学研究科修士論文.
- Kuehl, B. P., Schumn, W. P., Russell, C. S. and Jurich, A. P. (1988). How do subjects interpret items ins Olson's Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale (FACES) ?. *Educational and Psychological Measurement*, 48, 247-253.
- Lovinger, J. (1957). Objective tests as instruments of psychological theory. *Psychological Report*, (Monograph supplement 9), 3, 635-694.
- Moos, R. H. (1974). *Family Environment Scale form R*. Consulting Psychologists Press.
- 西川京子 (1995)『断酒継続に影響を与える家族要因の研究—家族機能、共依存、家族グループ参加、自助集団参加などの要因を中心に—』、関西学院大学大学院社会学研究科修士論文.
- Olson, D. H., Sprenkle, D. H. and Russell, C. S. (1979). Circumplex model of marital and family systems: I. Cohesion and Adaptability dimensions, Family types, and clinical applications. *Family Process*, 18, 3-28.
- Olson, D. H., Sprenkle, D. H. and Russell, C. S. (1983). Circumplex model of marital and family systems:IV. Theoretical update. *Family Process*, 22, 69-83.
- Olson, D. H., Bell, R., and Portner, J. (1978). *FACES: Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales*. St. Paul: Family social Science, University of Minnesota.
- Olson, D. H., Portner, J. and Bell, R. (1982). *FACES II: Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales*. St. Paul: Family social Science, University of Minnesota.
- Olson, D. H., Portner, J. and Lavee, Y. (1985). *FACES III: Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales*. St. Paul: Family social Science, University of Minnesota.
- 岡堂哲雄編 (1992)「家族のライフ・コースと発達段階」、『家族心理学入門』、培風館、85-95.
- 大塚美和子・立木茂雄 (1991)「Clinical Rating Scale によるオルソン円環モデルの実証的検証」、『家族心理学研究』、5 (1)、15-32.
- Pratt, D. M. and Hanson, J. C. (1987). A test of the curvilinear hypothesis with FACESⅡ and Ⅲ. *Journal of Marital and Family Therapy*, 13, 387-392.
- Russell, C. S. (1979). Circumplex model of marital and family systems Ⅲ: Empirical evaluation with families. *Family Process*, 18, 29-45.
- Skinner, H. A. (1987). Self-report instruments for family assessment. In Jacob, T. (Ed), *Family interaction and psychopathology*, (427-452). New york: plenum.
- Sauer, R. J. (1982). Family enmeshment. *Family Therapy*, 9-(3), 299-304.
- 武田 丈・立木茂雄 (1989)「家族システム評価のための基礎概念：オルソンの円環モデルを中心として」、『関西学院大学社会学部紀要』、60、73-97.
- 武田 丈・立木茂雄 (1991)「オルソン円環モデルの構成概念妥当性の検証に関する方法論的研究」、『家族心理学研究』、5(1)、33-51.
- Tatsuki, S. (1993). The construct validity of the circumplex model of marital and family systems (Ⅶ) : Confirmatory factor analytic Inter- and Intra- cultural cross validation.『関西学院大学社会学部紀要』、67、143-165.
- 立木茂雄 (1994)「登校ストレスと家族関係—共分散構造分析による因果モデルの検証—」、『日本家族心理学会 (編) 家族心理学年報12 : 家族における愛と親密』、金子書房、50-65.
- 立木茂雄・栗本かおり (1994)「青少年における自我同一性の発達及びその拡散現象としてのアパシー傾向に対する家族システムの影響：共分散構造分析によるクローティヴァントとオルソンのモデルの比較検討」、『青少年問題研究』、43、1-30.
- 豊田秀樹・前田忠彦・柳井春夫 (1992)『原因をさぐる統計学』、講談社ブルーバックス .
- Tutty, L. M. (1995). Theoretical and practical issues in selecting a measure of family functioning. *Research on Social Work Practice*, 5 (1), 80-106.
- 遊左安一郎 (1984)「ミニューチンの家族構造療法」、『家族療法入門』、星和書店、107-164.
- Vadvik, I. H. and Eckblad, G. F. (1993). FACESⅢ and the Kvebeak Family Sculpture Technique as measures of cohesion and closeness. *Family Process*, 32, 221-223.
- Walker, L. S., McLaughlin, F. J. and Greene, J. W. (1988). Functional illness and family functioning : A comparison of healthy and somaticizing adolescents. *Family Process*, 27, 317-325.

The development of FACESKGIV for families with adult children: Testing its construct validity and the curvilinear hypothesis of the Circumplex Model of Marital and Family Systems.

ABSTRACT

The Circumplex model of marital and family systems has received wide attention from both researchers and practitioners in the field of family studies/therapy. Up until now, however, its empirical instruments have repeatedly failed to show one of the most fundamental hypotheses of the model, namely the curvilinear relationship between the model's two dimensions, cohesion and adaptability, on one hand, and the functioning/adaptiveness of the family system on the other. Critical examinations on items from FACES, FACESII, FACESIII, FES, and FAM revealed that their "enmeshment" items represent nothing but family support and warmth and failed to capture the extremely and dysfunctionally high state of cohesion. Based on the literature review, the concept of enmeshment was defined as an "interwined, interwoven, overinvolved, and preoccupied state of family system". The 8 point Thurstone equal distance appearing scale was constructed on both cohesion and adaptability dimensions, where both ends of the scale represents dysfunctionality. From an item pool of 443 cohesion and 166 adaptability items, an 83 item (50 cohesion and 33 adaptability) preliminary scale was administered to 348 couples whose children graduated from the School of Sociology, Kwansei Gakuin University and were in their 20's and 30's. 291 (83.6%) couples returned the questionnaire. Single-parent responses and high response bias cases were excluded and data from 221 (63.5 %) couples were used for item analyses. The average ages of family members were 58.1 years for father, 54.3 for mother, and 28.5 for the eldest child. From the item analyses, the 18 cohesion and 16 adaptability final scales for father, and the 16 cohesion and 15 adaptability final scales for mother were constructed. Structural equation modeling techniques were applied to the multitrait (cohesion and adaptability) -multimethod (father and mother report) matrix and it supported the final scale's convergent and discriminant validities. In order to examine the curvilinear hypothesis, and the Addiction Screening Test for Wives of Alcoholics (ASTWA) were also administered to the mothers. The ASTWA measures the level of "codependency" which enables more alcohol/drug dependence on the side of the husband. A very clear U shape curvilinearity was evidenced between the wives' cohesion and codependency, while somewhat clear curvilinearity was observed between the wives' adaptability and codependency. This study is one of the first of its kind to ever support the Circumplex model's curvilinear hypothesis using a questionnaire scale.

Key Words : Circumplex Model, curvilinear hypothesis, FACESKG